

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

日西モダリティ対照研究史 (1)

| | |
|-------------|---|
| タイトル(その他言語) | Historia de los estudios contrastivos de la modalidad en español y japonés 1 |
| 著者 | 福鳶 教隆 |
| 雑誌名 | 神戸外大論叢 |
| 巻 | 63 |
| 号 | 3 |
| ページ | 3-11 |
| 発行年 | 2013-03-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1085/00001376/ |

日西モダリティ対照研究史(1)

福畠 教隆

1. はじめに

ある言語の仕組みを調べる際に、系統のまったく異なる言語と対照することによって、新しい視点が生まれ、分析が進むことがある。日本語とスペイン語（イスパニア語）の対照研究（以下、「日西対照研究」と呼ぶ）によって、態、主題、語順、指示詞、格助詞と前置詞、母音など、さまざまな分野についての提言が行われてきた。2004年までの成果は、出口（1989）、国立国語研究所・編（1994）、拙稿（1997、2000a）、拙稿（2002）、拙稿（2003）および和佐（2005a）で知ることができる。それ以降も山村（2005）、和佐（2006）、三好（2009）、川口（2009）、Almaraz 他（2010）、山村・他（2010）、長谷川・他（2011）など、数多くの優れた研究が発表されている。筆者も拙稿（2004、2011a、2011b）を著した。近年では、日本語話者に対するスペイン語教育につながる研究も際立つ。また、日本語の特質をスペイン語で詳しく論じた三好（2012）のような意義深い著述も上梓された。

日本語とスペイン語のモダリティに関しても、一方の言語を光源としてもう1つの言語を照射する試みが蓄積されている。拙稿（2002a）で、その時点までの成果を振り返ったが、その後も進展が見られたので、本稿で改めて諸提案を整理して、更なる発展の契機を探ってみたい。

なお、Johnson（2003）、湯本（2004）、黒滝（2005）、澤田（2006）など、日本語と英語のモダリティの対照研究においても、近年、多くの提案が発表されているが、その検討は別の機会に譲りたい。

2. 日本語の陳述・モダリティ研究¹

国語学、日本語学では、陳述、モダリティの概念をめぐって、数多くの研究が行われてきた。ここではごく手短かにその流れを見ていくことにする。

陳述研究の嚆矢とされるのが、山田（1936）である。山田は「主位の観念と賓位の観念との二者の関係を明かにすること」を「陳述をなす」と表現する。そして陳述は、たとえば次の文における「咲く」のように、述語に存すると考

1 この節は拙稿（2000）の第2. 1節に加筆したものである。

えた (pp.677-688)。Narrog (2010b) によれば、この着想は、イギリスの Henry Sweet の predication、ドイツの Wilhelm Wundt の Aussage (satz)、同じくドイツの Johann Christian August Heyse の Aussage という概念を参考にしたという。

(1) 花が [咲く 陳述]

時枝 (1950) は、概念作用による事柄の客体化の表現である「詞」と、主体的表現である「辞」を区別し、陳述は後者によって表されると説く。従って次の (2a) のような場合には、「辞」である助動詞の部分に陳述が存在し、(2b) のように、述語に「辞」に当たる語がない場合には、「零記号の陳述」を認めるべきだという (pp.256-261)。

(2) a. [[朝晩は冷え 詞] ます 辞]

b. [[花が咲く 詞] φ 辞]

渡辺 (1953) は、終助詞によって代表される「言語者をめあての主体的なはたらきかけ」を「陳述」と呼ぶ。これは、終助詞を除いた述語部分の「思想や事柄の内容を描き上げようとする話手のいとなみ」(これを「叙述」と呼ぶ)とは区別される。そして次の例のように、文は素材に陳述が結合して成立すると考える (渡辺 1971 : 第 1-3 節)。

(3) [[[[桜の花 素材] が 素材 : 展叙] 咲く 素材 : 叙述] よ 陳述]

芳賀 (1954) は、陳述は 2 種類に分けるべきだと言う。第 1 は「事柄の内容についての、話手の態度の言い定め」であり、これを「述定」と呼ぶ。第 2 は「事柄の内容や、話手の態度を、聞手に向かってもちかけ、伝達する言語表示」であり、これを「伝達」と名付ける。

(4) [[[[雨が降る 叙述] だろう 陳述1 : 述定] ね 陳述2 : 伝達]

南 (1974) は、従属節の中に「ことがらの世界から陳述的世界への段階」(p. 133) が認められることに着目し、従属節を文らしさの度合いに応じて A~C の 3 階層に分類する。次の (5a-c) がその例である。また、(5d) のように従属節に収まらない要素は D 類とする。

| | | |
|-------------------------|---------------|------------------------|
| (5) a. A類 : ながら (継続)、つつ | ↑ ↓ 従属句 | ↑ ↓ ことがらの 陳述的 |
| b. B類 : ながら (逆接)、ので、たら | | |
| c. C類 : が、から、けれど | | |
| d. D類 : 呼びかけ、終助詞 | | |

国語学では、このようにして陳述という概念の規定が精緻化し、それを担う言語形式のありかが極限されている。その後発達した日本語学でも、文を素材的成分と陳述的成分とに分けて考える見地が広い支持を集め、後者をモダリティ、場合によってはムードという術語で呼ぶことが一般的になった。

たとえば寺村 (1984) は、「現実のいろいろな場で、話し手が、コトを相手の

前にもち出すもち出し方、態度を表す部分」(p.12)を「ムード」と名付け、文は、次の例のように、コトをムードが包んで構成されると考える (p.222)。

(6) [[[[子どもが生まれ コト] た ムード₁] のだ ムード₂] そうだ ムード₂]

一方、益岡 (1991) は、ムードという術語を「動詞類の屈折体系に係わる文法範疇の1つ」という意味で、個別言語に関する概念として使用し、モダリティとは区別する。モダリティは、「判断し、表現する主体に直接係わる事柄を表す形式」という、一般性の高い概念である (pp.29-30)。同書では、文は命題とモダリティの総体と見なされ、後者は「表現系モダリティ」、「判断系1次的モダリティ」、「判断系2次的モダリティ」に分けられる。この3種は各々3種、2種、4種のモダリティに下位区分される。

その後、益岡はこの主張に改良を加え、2007年には、主観性とモダリティを安易に結び付けぬよう留意しつつ、日本語のモダリティのカテゴリーについて次のような見解に達した。(7)はモダリティの分類、(8)は文の意味的階層構造の例である (pp.5, 7. M1: 判断のモダリティ、M2: 発話のモダリティ、P1: 一般事態、P2: 個別事態の各領域を指す)²。

- (7) a. 判断のモダリティ: 真偽判断のモダリティ、価値判断のモダリティ
 b. 発話のモダリティ: 発話類型のモダリティ、対話のモダリティ
 (後者を丁寧さのモダリティと対話態度のモダリティに下位区分)
 c. 特殊なモダリティ: 説明のモダリティ、評価のモダリティ

(8) [ねえ M2 [どうやら M1 [昨夜 P2 [激しく雪が降る P1] た P2] ようだ M1] よ M2]

このように、国語学では機能も所在も限定して捉えられた陳述は、日本語学ではモダリティの名で換骨奪胎して、そのありかが助動詞・終助詞部分へと拡張され、その働きも一層精密に分類されることになった。なお、この分析方法の前提となる「命題をモダリティが包んだものが文である」という考え方に対して、尾上 (1996) のように疑義を呈する研究者もいることにも留意されたい。

3. スペイン語のモダリティ研究

スペイン語学でモダリティの概念に最も早く言及した研究書の1つは、Real Academia Española (1973) であろう。同書では、スイスの Charles Bally の学説に基づき、文を「表現される内容」と「それを話し手の心的態度との関係でいかに表すか」という部分とに分け、前者を「事理(dictum)」、後者を「様態(modus)」

2 なお、益岡 (2009) は、この考え方を英語で簡潔明快に説明している。また、仁田 (2009) にもモダリティ研究に多大な貢献を行った論考が収められている。

と呼ぶ (p.454)。この「様態」はモダリティの概念に近いと考えれる。

その後、Otaola (1988)、Jiménez Juliá (1989)、Igalada (1990) のように、「モダリティ (modalidad)」を主題として論じる研究が公刊された。これらは共通して、文や節が表す事柄をモダリティが包み込むという考え方を是とし、モダリティを次のように、まず2種に区分した上で下位区分している³。

- (9) a. Otaola (1988) :
 発話行為のモダリティ (平叙、疑問、命令)
 発話内容のモダリティ (論理、評価)
- b. Jiménez Juliá (1989) :
 発話行為のモダリティ (平叙、疑問、命令)
 発話内容のモダリティ (断定、蓋然性、主観性、確実性)
- c. Igalada (1990) :
 発話行為のモダリティ (平叙、疑問、命令)
 発話内容のモダリティ (言及なし)

Real Academia Española が1999年と2009年に刊行した文法書では、叙法の章や文の種類でモダリティへの詳しい言及がある⁴。まず Bosque *et al.* (eds.) (1999) 第49章では、「言語モダリティ (modalidad lingüística)」は「形作られる命題の内容の真偽についての、または発話行為に対する参加者たちの態度についての、話し手のさまざまな立場による発話の諸相」(p.3211) と定義される。そして言語モダリティの中に次のような区分を認める。言うまでもなく、(10a) と (10b) は異なる基準による分類である。

- (10) a. 発話行為のモダリティ、発話内容のモダリティ
 b. 認識モダリティ、義務モダリティ

次に Real Academia Española *et al.* (2009) 第42章では、モダリティは「伝達内容に関する話し手の態度の言語的表明」(p.3114) と定義される。ここでは「発話態度のモダリティ (modalidad de enunciación)」が論じられ、文の種類に応じて次のように区分されている。

- (11) 平叙のモダリティ、疑問のモダリティ、感嘆のモダリティ、
 命令のモダリティ

また同書第25章では、「叙法はモダリティの表出の1つである」(p.1866) とし

3 これらの研究については、拙稿 (1991) で詳しく紹介した。なお、出口 (1982) のように、「法概念、法範疇、法実現の cover term」(p.2) である「法性」を扱った研究も存在する。同論文では、モダリティは「文の非命題的部分を漠然と指す文の成分」とみなし、「法性」とは区別している (p.2)。

4 詳しくは拙稿 (2011c) を参照。

て、モダリティと叙法の間係を明示している。

以上のように、スペイン語学では、一般に、モダリティは平叙、疑問、命令といった文の種類と関連づけて論じられ、また「発話行為のモダリティ」と「発話内容のモダリティ」の区分にも言及されることが多い。後者は日本語学でしばしば説かれる区分と軌を一にしており、大変興味深い⁵。

なお、世界のさまざまな言語のモダリティを扱った Palmer (1986, 2001) は、モダリティを次のように区分する⁶。

(12) a. Palmer (1986)

認識モダリティ：判断、根拠

義務モダリティ：行為指示、行為拘束、願望、評価

b. Palmer (2001)

対命題モダリティ (propositional modality) :

認識モダリティ (推論、演繹、仮定)

根拠モダリティ (伝聞、感覚)

対事象モダリティ (event modality) :

義務モダリティ (許可、責務、行為拘束)

動的モダリティ (能力、願望)

その他：前提、否定、疑問、命令、未来、条件、目的、結果、危惧

一見して分かる通り、2001年の第2版では、非常に精緻な区分が提案されている。しかしスペイン語に関する限り、叙法の諸用法の大半は「その他」のモダリティに位置づけられる点は問題ではないかと思われる。

また言語類型論の概説書である Whaley (1997) は、モダリティを「ムードの概念上の領域」(邦訳 p.221) と規定し、義務モダリティと認識モダリティを認めつつも、「モダリティ概念は言語によって異なった形で現れるので、あらゆる言語に適用できるような簡潔な定義を与えるのはほとんど不可能だ」(邦訳 p. 222) と断っている。

さて、モダリティの対照研究としては、本田 (1985)、拙稿 (1990) (2000b) (2001) (2002)、和佐 (1999) (2001) (2005a)、野田 (2000)、上田 (2002)、寺崎 (2011) などが挙げられる。以下では、これらを「狭義のアプローチ」と「広義のアプローチ」(違いは後述) とに大別し、それぞれの主張を検討していく。

5 和佐 (2005 : 11) もこの点に注目している。

6 Palmer (1986, 2001) については拙稿 (2002b) で詳しく論じた。

以下次稿：

4. モダリティの対照① 狭義のアプローチ
5. モダリティの対照② 広義のアプローチ
6. むすび

参考文献

- Almaraz Romo, Enrique・濱松法子・安富雄平 (2010) 「日本語の接頭辞「お」とスペイン語の縮小辞との形態および機能に関する対照研究」、『拓殖大学語学研究』123、pp.27-58、東京：拓殖大学。
- Bosque, Ignacio (2012) “Mood: indicative vs. subjunctive”, *The Handbook of Hispanic Linguistics* (José Ignacio Hualde, Antxon Olarrea & Erin O’Rourke, eds.), pp.373-394, Oxford: Blackwell.
- ____ y Violeta Demonte (eds.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid: Espasa.
- 出口厚美 (1982) 「スペイン語における叙法と法性」、『大阪外国語大学学报』56、pp.1-16、箕面：大阪外国語大学。
- ____ (1989) 「国内の雑誌等に発表されたスペイン語に関する文献 (1952-1988) [その2]」、『大阪外国語大学論集』2、pp.53-82、箕面：大阪外国語大学 (pp.66-67 「対照 (日本語)」)。
- 芳賀 綏 (1954) 『“陳述” とは何もの?』。『國語國文』23、pp.241-255、京都：京都大学。
- 長谷川信弥・山田敏弘 (2011) 『日本語から考えるスペイン語の表現』、東京：白水社。
- 本田誠二 (1985) 「日本語とスペイン語の叙法性に関する一考察」、『熊本商大論集』31、pp.687-708、熊本：熊本商科大学。
- Igalada Belchi, Dolores Anunciación (1990) “Modalidad y acto de habla. A propósito de los enunciados causales en español”, *Verba* 17, pp.231-240, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.
- 井元秀剛 (2011) 「論評：東郷雄二『中級フランス語 あらわす文法』、曾我祐典『中級フランス語 つたえる文法』、西村牧夫『中級フランス語 よみとく文法』白水社、2011」、『フランス語学研究』44、pp.69-75、東京：日本フランス語学会。
- Jiménez Juliá, Tomás (1989) “Modalidad, modo verbal y *modus clausal* en español”, *Verba* 16, pp.175-214, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.

- Johnson, Yuki (2003) *Modality and the Japanese Language*, Ann Arbor: The University of Michigan.
- 川口正通 (2009) 「譲歩解釈を受ける現在分詞構文の用法について ―日本語との対照から―」、*Estudios Hispánicos* 34、pp.81-96、豊中：大阪大学。
- 国立国語研究所・編 (1994) 『日本語とスペイン語 (1)』、東京：くろしお出版 (pp.171-175 「日西対照音声学」、pp.189-190 「形態・語彙の日西対照」、pp.194-205 「日西文法の対照」、pp.216-222 「日本人に対するスペイン語教育・スペイン語話者に対する日本語教育」)。
- ____ (1997) 『日本語とスペイン語 (2)』、東京：くろしお出版。
- ____ (2000) 『日本語とスペイン語 (3)』、東京：くろしお出版。
- 黒滝真理子 (2005) 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性。モダリティの日英語対照研究』、東京：くろしお出版。
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』、東京：くろしお出版。
- ____ (2007) 『日本語モダリティ探究』、東京：くろしお出版。
- ____ (2009) “Modality from a Japanese perspective”, *Japanese Modality. Exploring its Scope and Interpretation* (Barbara Pizziconi & Mika Kizu, eds.), pp. 36-55, Houndmills: Palgrave Macmillan.
- 南 不二男 (1974) 『現代日本語の構造』、東京：大修館書店。
- 三好準之助 (2009) 「多義語「目」と‘ojo’の日西対照研究」、*Hispanica* 53、pp. 41-60、東京：日本イスパニヤ学会。
- ____ (2012) *La atenuación del japonés. Un ensayo pragmatolingüístico*, Saarbrücken: Editorial Académica Española.
- Narrog, Heiko (2010a) *Modality in Japanese*, Amsterdam: John Benjamins.
- ____ (2010b) 『『日本文法論』における文成立関連の概念とヨーロッパの言語学 ―陳述、統覚作用、モダリティ、ムード』、『山田文法の現代的意義』(齊藤倫明・大木一夫・編)、pp.217-239、東京：ひつじ書房。
- 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』、東京：ひつじ書房。
- 尾上圭介 (1996) 「文をどう見たか」、『日本語学』15 : 9 (8月号)、pp.1-12、東京：明治書院。
- Otaola Olano, Concepción (1988) “La modalidad (con especial referencia a la lengua española)”, *Revista de Filología Española* 48: 1-2, pp.97-117, Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas.
- Palmer, Frank Robert (1986 1st. ed., 2001 2nd. ed.) *Mood and Modality*, Cambridge: Cambridge University.
- Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua*

española, Madrid: Espasa-Calpe.

____ y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa.

澤田治美 (2006) 『モダリティ』、東京：開拓社。

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、東京：くろしお出版。

寺崎英樹 (2011) 「スペイン語の認識モダリティ副詞と法・時制の相関」、『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から』(武内道子・佐藤裕美・編)、pp. 207-224、東京：ひつじ書房。

時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』、東京：岩波書店。

上田博人 (2002) 「日本語の「は」とスペイン語の接続法」、『日本語学』21: 8 (7月号)、pp.13-24、東京：明治書院。

和佐敦子 (1999) “El subjuntivo y la modalidad”, *Hispania* 82: 1, pp.121-127, Baltimore: AATSP.

____ (2001) 「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞—疑問文との共起をめぐる—」、『言語研究』120、pp.67-88、京都：日本言語学会。

____ (2005a) 『スペイン語と日本語のモダリティ』、東京：くろしお出版。

____ (2005b) 「日本語とスペイン語の対照研究の動向」、『日本語と諸言語の対照研究』(外国学研究 61) (益岡隆志・編)、pp.137-145、神戸：神戸市外国語大学。

____ (2006) 「スペイン語と日本語の条件表現—叙法と時制の観点から—」、『条件表現の対照』(益岡隆志・編)、pp.151-171、東京：くろしお出版。

渡辺 実 (1953) 「叙述と陳述—述語文節の構造—」、『國語學』13・14、pp.20-34、東京：国語学会。

____ (1971) 『国語構文論』、東京：塙書房。

Whaley, Lindsay L. (1997) *Introduction to Typology*, Thousand Oaks: Sage Publications. (2006) 大堀壽夫・古賀裕章・山泉実・訳 『言語類型論入門』、東京：岩波書店。

山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』、東京：寶文館。

山村ひろみ (2005) 「職業名詞に見る「男」と「女」の表され方—日本語とスペイン語の対比から—」、『言語と文化のジェンダー』(谷口秀子・他・編)、福岡：九州大学。

____・高垣敏博 (2010) 「スペイン語の時制—日本語との対照—」、『語学研究所論集』15、pp.161-180、東京：東京外国語大学。

湯本久美子 (2004) 『日英語認知モダリティ論—連続性の視座』、東京：くろしお出版。

- 拙稿 (1990) “Sobre la cláusula superregente”, *Indicativo y subjuntivo* (Ignacio Bosque, ed.), pp.164-179, 435-436, Madrid: Taurus.
- _____ (1991) 「イスパニア語モダリティ研究の最近の動向について」、『神戸外大論叢』42 : 1、pp.1-13、神戸：神戸市外国語大学。
- _____ (1997) 「日西対照研究文献リスト (補遺及び1994～1997年)」、『日本語とスペイン語 (2)』(国立国語研究所・編)、pp.297-300、東京：くろしお出版。
- _____ (2000a) 「日西対照研究文献リスト」、『日本語とスペイン語 (3)』(国立国語研究所・編)、pp.313-326、東京：くろしお出版。
- _____ (2000b) 「日西モダリティ対照研究序説」、『日本語とスペイン語 (3)』(国立国語研究所・編)、pp.187-210、東京：くろしお出版。
- _____ (2001) “En busca del valor del modo subjuntivo (desde el punto de vista de la lingüística japonesa)”, *Hispanica Polonorum* 3, pp.102-113, Lodz (Poland).
- _____ (2002a) 「スペイン語と日本語のモダリティの対照について」、『日本語学』21 : 2 (2月号)、pp.68-76、東京：明治書院。
- _____ (2002b) 「書評：Frank Robert PALMER, *MOOD AND MODALITY*, 2nd. ed., Cambridge University Press, 2001」、*Hispanica* 46、pp.130-134、東京：日本イスペニヤ学会。
- _____ (2003) 「スペイン語と日本語の主題の対照研究の動向」、*Clavel* 1、pp.48-58、神戸：対照研究セミナー。
- _____ (2004) 「スペイン語の主題に関する記述的研究」、『主題の対照』(益岡隆志・編)、pp.129-148、東京：くろしお出版。
- _____ (2011a) “Las expresiones de rol en español —un estudio contrastivo con el japonés—”, *Cuadernos CANELA* 23、pp.9-26、京都：日本・スペイン・ラテンアメリカ学会。
- _____ (2011b) 「スペイン語の主題に関する一考察 —日本語との対照を通じて—」、『ロマンス語研究』44、pp.11-20、東京：日本ロマンス語学会。
- _____ (2011c) 「スペイン王立学士院の叙法の取り扱いについて」、『神戸外大論叢』62 : 4、pp.7-20、神戸：神戸市外国語大学。